

吉備の超巨大古墳

―造山古墳群―

西田和浩

【目次】

第1章 超巨大古墳がなぜ岡山に？……………4

- 1 造山古墳の魅力……………4
- 2 造山古墳の生まれた舞台……………11
- 3 大型古墳の系譜……………14

第2章 みえてきた陪塚のすがた……………21

- 1 第四古墳の発掘……………21
- 2 第二古墳の発掘……………24

第3章 千足古墳の発掘……………29

- 1 直弧文損傷の衝撃……………29
- 2 第二石室の発見……………41
- 3 千足古墳の出土遺物……………50

第4章 造山古墳の発掘……………52

- 1 超巨大古墳を発掘する……………52
- 2 造山古墳の出土遺物と遺構……………58

第5章 だれが埋葬されているのか？……………61

- 1 榊山古墳の被葬者……………61
- 2 千足古墳の被葬者……………65
- 3 独自のネットワークと倭王権とのつながり……………72
- 4 直弧文の謎……………73

第6章 吉備政権を支えた人びと……………77

- 1 超巨大古墳築造の源泉……………77
- 2 人・モノ・文化の交流……………85
- 3 造山古墳以後の吉備……………87
- 4 これからの造山古墳群……………89

参考文献……………92

編集委員

勅使河原彰（代表）

小野 昭

小野 正敏

石川日出志

小澤 毅

佐々木憲一

装 幀 新谷雅宣
本文図版 松澤利絵



図1・造山古墳空撮（東から）
 前方部前端にみえる谷は、尾根を切断した痕跡。後円部は直径206m、高さ29.7mで、前方部は前端216m、高さ22.5m。そのむこうに陪塚群が広がる。右端にみえる丸い水田は新庄車塚古墳の跡。

表1・巨大古墳一覧
 墳丘規模（周濠除く）の1～10位はすべて前方後円墳である。このなかで自由に立ち入りできる古墳は造山古墳・作山古墳のみとなる。五条野丸山古墳は後円部の中心には入れない。

順位	古墳名	所在地	時期	墳長(m)	備考
1	大山古墳	大阪府堺市堺区大仙町	中期	486	現・仁徳天皇陵
2	誉田御廟山古墳	大阪府羽曳野市誉田	中期	420	現・応神天皇陵
3	石津ヶ丘古墳	大阪府堺市西区上野芝町	中期	365	現・履中天皇陵
4	造山古墳	岡山県岡山市北区新庄下	中期	350	
5	河内大塚山古墳	大阪府松原市・羽曳野市	後期	335	陵墓参考地
6	五条野丸山古墳	奈良県橿原市五条野町	後期	318	後円部中心部が陵墓参考地
7	渋谷向山古墳	奈良県天理市渋谷町	前期	310	現・景行天皇陵
8	土師ニサンザイ古墳	大阪府堺市西区百舌鳥西之町	中期	288	陵墓参考地
9	仲津山古墳	大阪府藤井寺市沢田	中期	286	現・仲津媛皇后陵
10	作山古墳	岡山県総社市三須	中期	282	

第1章 超巨大古墳がなぜ岡山に？

1 造山古墳の魅力

自由に入れる日本一大きい古墳

岡山市の造山古墳（**図1**）は全国第四位の規模で、自由に立ち入ることができる日本一大きい古墳である（**表1**）。三段築成の前方後円墳で、墳長はおよそ三五〇メートルある。近くにある総社市の作山古墳と同じ読みなので、地元では「ゾウザン（造山）」・「サクザン（作山）」とよびわけている。

三〇〇メートルを超える大王墓級の前方後円墳を自由に歩いて観察できる点が造山古墳の大きな魅力だ。しかし、実際に訪れてみても、事前に調べていなければどこをみていいのか、見所がよくわからない。そしてあまりに巨大なので歩きまわるだけで一苦労だ。

ここでは、実際に訪れたい人に役立つよう、造山古墳の見学ポイントを紹介したい（**図2**）。

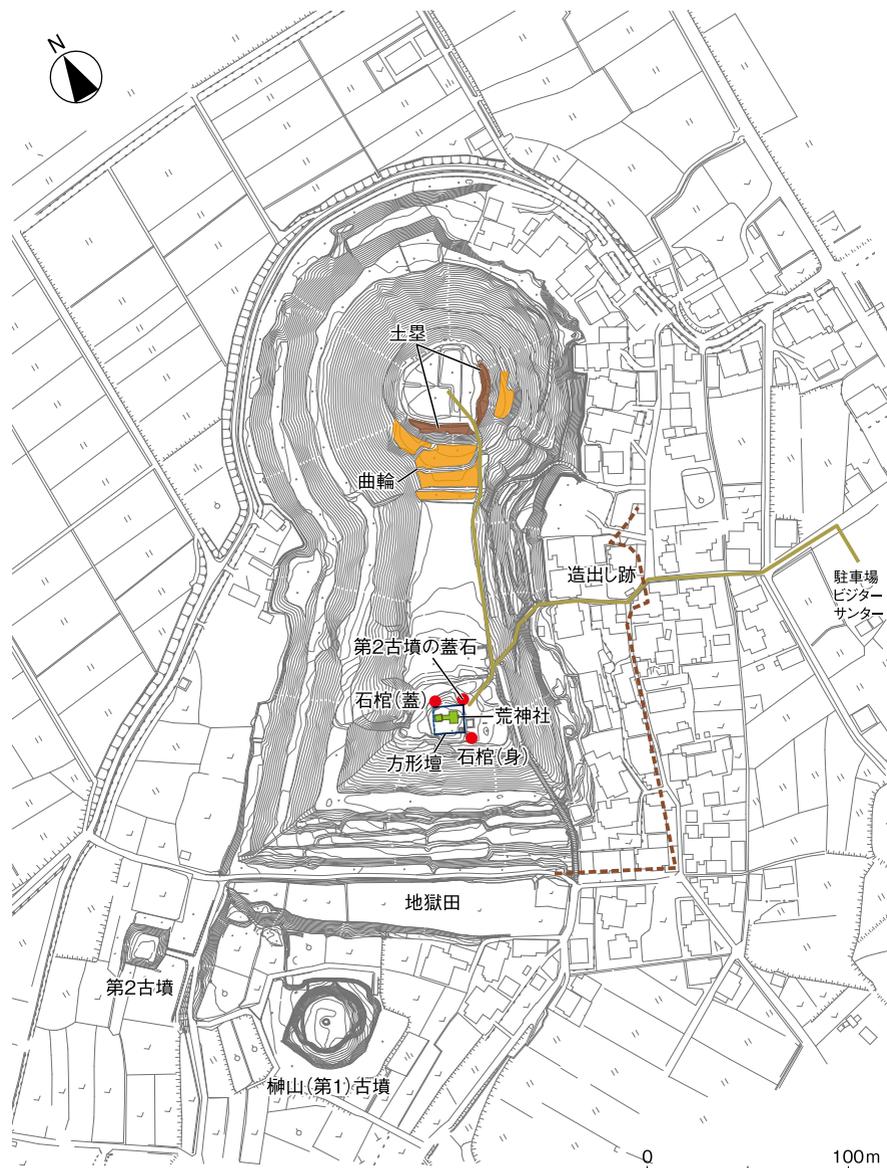


図2・造山古墳の見学ルート

墳丘東は宅地化で失われている。見学にはうぐいす色で示したルートが利用しやすい。前方部に説明板や石棺がある。墳丘主軸は真北ではなくやや東に傾く。地獄田とよばれる谷は造山古墳築造のために尾根を切断した跡で、この谷を周濠の痕跡とする見方がある。

歩く時期は、マムシや蚊が多い夏期を避け、晩秋から冬がおすすめだ。

造山古墳駐車場から、西にみえる小山にむかって道を歩く。この山が造山古墳である。道の途中で登り坂がはじまる。坂と平坦地は集落を南北に通る道路を境にしており、この道路が墳丘の範囲（墳端）をあらわしている。

さらに坂を上ると途中から階段になる。階段を上りきると、ここは三段目（最上段）にあたる。最上段の規模だけでも、墳長二七〇メートル、後円部の直径が一三〇メートルにもなる。右に進むと後円部へ、左に進み石段を上がると「荒神社」がある。

後円部からの眺め

後円部にむかって歩くと、後円部の斜面が削られて平らになっている場所がある。これは曲輪の跡といわれる。戦国時代、織田軍と毛利軍が対峙し、羽柴秀吉の「中国大返し」や水攻めで有名な「備中高松城の戦い」の際、毛利方の砦として利用された跡とされる。造山古墳から北の庚申山陣跡には吉川元春、南の日差山城跡には小早川隆景が布陣したらしい。

後円部の墳頂部に登ってみる。縁の一部が高くなっているのは土塁の跡である。ここからの眺望は素晴らしい。東に目をむければ足守川流域に広がる平野を一望できる。

足守川流域の平野には山陽自動車道建設工事の際、古墳時代の集落跡が広くみつかっている。対岸には、最上稲荷の赤い大鳥居がみえる。備中高松城はこの大鳥居から左にある。北に目を転じてはるか先、山頂の山肌が露出しているあたりが古代山城「鬼ノ城」である。

墳頂部の中心には埋葬施設があるはずだが、その規模や位置は不明だ。墳頂部が過去に畑として利用された際、ここから古銅輝石安山岩が出た、という話がある。古銅輝石安山岩は香川県で産出する石材で、吉備の古墳で使用される（本書では「安山岩」とよぶことにする）。造山古墳後円部の埋葬施設は堅穴式石室の可能性が高い。

前方部の石棺

つぎに前方部の荒神社へむかう。ここは見所が多い観察ポイントだ。神社の地面は周囲よりも高くなっている。一辺一五〜二〇メートルのこの高まりは方形壇の痕跡の可能性がある。前方部に壇をもつ巨大古墳は、古墳時代前期で奈良県の西殿塚古墳、中期で大阪府の石津ヶ丘古墳（履中陵古墳）・誉田御廟山古墳（応神陵古墳）と少ない。方形壇は格の高い一部の古墳にかぎられる特徴といえる。

ここには造山古墳の説明板がある。その近くに前方部から出土したと伝わる石棺がおかれている（**図3**）。石棺は「身」とよばれる遺体を置くパーツで、阿蘇溶結凝灰岩の巨石をくり抜き、棺底は一方が枕のように少し高くなっている。

外面小口には四角い突起が彫刻されている。畿内の長持形石棺は板石を組み合わせ小口に縄掛け突起とよばれる突出部がある。これをまねて表現したのだろう。高木恭二の分析によると、石棺の製作地は熊本県宇土市の馬門と推定される。また、神社の石垣の一部に阿蘇溶結凝灰岩が使用されていることを同氏が確認している。石棺の破片を利用したのだろう。

石棺は身と蓋でセットになる。これと対になる蓋が近くにある。蓋は長さ一二〇センチ、幅一〇五センチ、厚さ約三〇センチの破片となつて残る。内面には赤色顔料が残る。宇垣匡雅の観察によると、小口面に線刻があり、直弧文と推定される。このほか第二古墳の埋葬施設の蓋石とされる大きな安山岩の板石がおかれている。

丘尾切断の墳丘

前方部から南をみると谷をはさんで榊山古墳（第一古墳）がみえる（**図1・6**）。その奥には現在整備中の千足古墳（第五古墳）、西（右）に第二古墳がみえる。いずれの墳丘も造山古墳より低位置に築造されているから、造山古墳は千足古墳たちをしたがえた感覚になる。榊山古墳がのる丘陵と造山古墳はかつて一続きの尾根だったことが、測量図をみるとわかる。尾根を人工的に切断し、切り離れた尾根を加工して、



図3・前方部の石棺

巨石をくり抜いてある。長さ約239cm、幅115cm、高さ75cm以上、側面の厚さが20～30cmある。石材は九州・宇土半島産の阿蘇溶結凝灰岩。写真奥側棺底の一方は枕のように高くしてある。小口にある四角い突起は畿内の長持形石棺をまねている。

造山古墳が築造されたことを示している。

切断の跡には、地獄田じごくだとよばれる浅い谷が残されている(図2)。谷は前方部前端と平行にのび、丘尾切断に要した人員や道具を想像すると、動員された労働力がどれほどのものだったのか、吉備の王の実力を実感できる。造山古墳築造時には日本最大の古墳、大山古墳だいせん(仁徳陵古墳にんとく)は存在しない。造山古墳は、石津ヶ丘古墳(履中陵古墳)や誉田御廟山古墳(応神陵古墳)に埋葬された、倭の大王たちにとって無視できない存在だったのではないか。

造山古墳のような大きな主墳のまわりに中小の古墳が配置されるとき、これらの古墳を陪塚ちまうとよぶことがある。陪塚は王の親族や有力な従者など王を支えた人物の墓とされる。

造山古墳を降りて、陪塚群にむかうには、東側の石段を下るか、西側の前方部コーナーに沿って下るかの二つのルートがある。石段を下ると右手に前方部が確認できるが、畑などで削られているため段築は観察しづらい。一方、西側のコーナーを下ると、西側面の段築をよく観察できる。また、一段目のくびれ部にある造出つくりだしもよくみえる。

造山古墳を降りた後は、第二古墳または榊山古墳が最寄りの古墳となる。工事中の千足古墳以外は自由に立ち入ることができる。古墳観察の際には、マムシがいるので注意すること、古墳に隣接する畑などの民有地に無断で立ち入らないこと、埴輪や土器などが落ちていても拾わないこと、に注意して歩いてもらいたい。また、造山古墳全体を写真に撮りたい人は、新庄上(新庄車塚古墳周辺の道路)から眺めると三段築成の姿がよくみえる。

2 造山古墳の生まれた舞台

吉備の大王墓

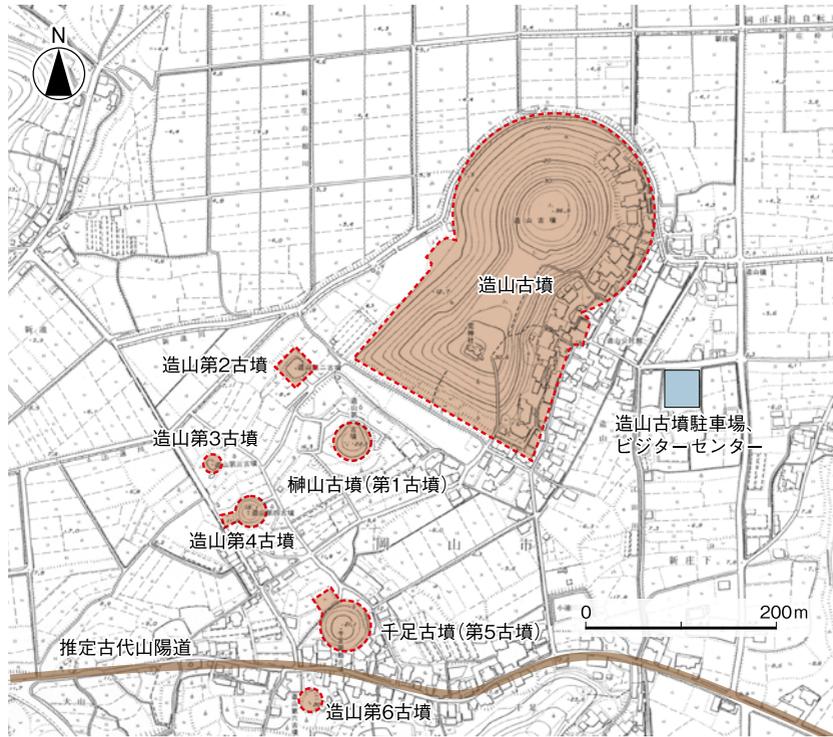
本書では、畿内の巨墳に比肩する超巨大古墳がなぜ岡山に築かれたのか、その背景に迫っていきたい。

造山古墳は岡山市北区新庄下しんじょうしもにある(図51参照)。倉敷市・総社市との市境、岡山屈指の遺跡集中エリアである。

この超巨大古墳を吉備の大王墓とみて異論はないだろう。造山古墳近く、南の低丘陵に陪塚とされる六基の個性的な古墳が築かれる(図5)。ただし、第二古墳は五世紀中ごろの築造で、五世紀初頭につくられた造山古墳と同時期ではなく、陪塚とは考えにくい。造山古墳とこれら六基をまとめて「造山古墳群」とよぶ。

西川宏は、造山・作山古墳について、吉備各地の地域集団からなる連合政権を吉備政権とし、その連合政権の最高首長の権力を象徴するものと評価し、陪塚の概念の定義や被葬者の性格について検討した。これらの成果は『吉備の国』(学生社)の一書にわかりやすくまとめられている。西川の論考は一地方の枠にとどまらない、現在も読まれるべき基本文献と評価されることに異存はないだろう。

造山古墳群は、一九二一年(大正一〇)三月三日に国の史跡に指定された。指定名称は「造山古墳 第一、二、三、四、五、六古墳」である。このうち前方後円墳は造山古墳のみである。第



古墳	墳形	規模	主体部	おもな出土遺物	築造時期	発掘
造山古墳	前方後円墳	全長 350m	竪穴式石室？	円筒埴輪 形象埴輪	5世紀前半	有
榊山古墳 (第1古墳)	円墳？	直径 35m	木棺	馬形帯鉤 陶質土器 (墳丘外)	5世紀前半	有 (明治末に乱掘)
第2古墳	方墳	一辺 30m	石室？	円筒埴輪 (墳丘外) 形象埴輪 (墳丘外)	5世紀中ごろ	有
第3古墳	円墳？	直径 30m？	不明	—	5世紀代	無
第4古墳	帆立貝形古墳	全長 55m	不明	円筒埴輪・形象埴輪	5世紀前半	有
千足古墳 (第5古墳)	帆立貝形古墳	全長 81m	横穴式石室	巴形銅器・鏡・玉・刀剣 など各種鉄器 (主体部他)	5世紀前半	有
第6古墳	円墳	直径 30m	石室？	—	5世紀代	無

図5・造山古墳群

造山古墳の陪塚とされる6基の古墳は、南の江田山からのびる低丘陵を利用して築造される。畿内の陪塚のように、主墳(造山)の周囲に計画的に配置されていない。前期古墳のように臨海地に立地しておらず、造山・作山・両宮山は古代山陽道を意識して内陸地に築造された。

遺跡の宝庫、足守川流域

造山古墳群は、足守川の西岸、北と西に三須丘陵、東は黒住丘陵にはさまれた谷の中央に突き出した標高一〇〇〜四〇メートルの低丘陵上に立地する(図51参照)。造山古墳にかぎらず吉備の古墳は丘陵を利用して

四古墳と千足古墳(第五古墳)は帆立貝形古墳、第二古墳は方墳、榊山古墳(第一古墳)・第三古墳・第六古墳は円墳とされる。ただし、墳形が確定しているのは造山古墳と千足古墳のみで、ほかは今後の調査によって規模や墳形が変わるかもしれない。帆立貝形古墳とは前方後円墳のなかで前方部が短く、上からみるとホタテ貝のように見える古墳のことである。前方部を短くするのは、前方後円墳の築造を許されず、規制を受けた結果という見方がある。



図4・造山古墳の位置

岡山市の西端、倉敷市と総社市の市境付近にある。この地域は重要な遺跡が集中し、吉備の中枢と考えられる。「日本書紀」などによると、岡山県から広島県東部周辺の地域は吉備とよばれた。古墳時代に吉備があったかどうか不明なので「キビ」とあわすこともある。